



ぷらっとシネマ 龍が語る中国現代史『失われた龍の系譜』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15454

龍が語る中国現代史『失われた龍の系譜』

萩原弘子

日本公開はないだろうと思っていた作品だが、3月公開が決まった。香港が生んだ世界のアクション・スター、ジャッキー・チェンの家族がたどった軌跡を追うドキュメンタリーだ。ニコニコ顔で危険を乗りきるこの俳優のアクション映画には関心のない私だが、女性監督によるドキュメンタリーという点に惹かれて観た。骨太の構成、自然なカメラづかいで、波乱万丈の一家の歴史を追っている。しかも単に一家族の話にとどまらず、現代中国の激動期を捉えた歴史ドキュメンタリーにもなっているところがみごとだ。

ジャッキー・チェンここでは脇役でしかない。中心にいるのは、彼の両親、特に父チェン・ジーピンである。オーストラリアにいる父が、なにが重要な話があると言う。ジャッキーは友人のアレックス・ロウを誘ってオーストラリアに向かう。ロウがいれば、父をビデオにおさめておくことができるだろう。ジャッキーはそのくらいのつもりでいた。出発点は私的な家族ビデオだった。

ジャッキーの本当の姓はチェンではない。父の話は最初からジャッキーを驚かせる。1930年代、中国本土で血気盛んな青年であったファン・ダオロンは、国民党工作員として働いた。戦争が終わり、毛沢東の中国に生きる道はないと見た彼は、妻子をあとにして香港に逃げる。国民党であった過去を消すために名前をチェン・ジーピンと変え、いくつかの仕事を経て、アメリカ大使館のコックとなる。チェン・ユエロンと出会って結婚し、息子が生まれる。それがジャッキーである。お互い過去に結婚歴のある同士で、どちらにもすでに子どもがいた。この映画以前にはジャッキーが知らなかった話が続く。

母ユエロンの娘二人は、母がした尋常でない苦勞をふりかえる。アヘンの売人、賭場の仕切り人であった母は裏世界の姐御として稼ぎ、娘を育てていた。しかしジーピンと

の結婚を機に、それまでの商売から足抜きする。駐香港アメリカ大使がオーストラリアに転任になり、彼に可愛がられたコックのジーピンも誘われて、夫妻はオーストラリアに渡る。ジャッキーは、両親のもとを離れて京劇学校で伝統演劇の修業をしていた。学校を終え、オーストラリアに戻って父とともにコックをしていたとき、映画をやらないかという友人からの電話が入る。それがスターへの道につながるわけだが、この映画ではちょっとしたエピソードでしかない。

なんとといっても圧巻は、父が南京時代に見た日本軍の暴虐についての証言である。日本軍による中国人殺害の現場が生々しく語られる。国民党の若き下っ端であった彼は、そこに立ち会うことが仕事だった。そういう立場からされる証言だけに信憑性がある。この場面が、日本公開時にカットされることがないか、しっかり見ておきたい。

きれいごとばかりではなかった人生を、数十年の沈黙ののちにいま語る父。そのしたたかさや明るさは民衆のものだ。中国に残した息子たちを探しだして再会するまでの父を、映画にしてさらすジャッキー・チェンの決断も容易ではなかっただろうと思う。私事に留まらない私事だからこそ、なされた決断にちがいない。日本が始めた戦争の傷痕は深い。

2003年夏、ロンドンで50席くらいの小劇場で観た。客は10人もいなかった。上映後、場内が明るくなってみると、観客全員が東アジア人だった。だれもが中国語で話を交わしながら出て行くなかで、ひとり私は釈明を求められている気分になった。ジャッキー・チェンの派手なアクションに拍手喝采する日本と、南京事件の事実すら否定する日本がある。そのどちらでもない日本人として、なぜこの映画を観るのか、どう観るのかという釈明である。

(監督メイベル・チャン 2003年 96分)